

---

# 垂水百済はマイナスである

久木篁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

垂水百済はマイナスである

### 【Zコード】

Z3050BA

### 【作者名】

久木簾

### 【あらすじ】

垂水百済はマイナスである。それは変えようのない現実だった。けれど不幸は望まない。幸福も望まない。無い無い、無い尽くし。凶悪な過負荷を携えながら、それでも信念を貫こうとする。これは喜劇かはたまた悲劇か。綻びだらけの人形劇の開幕です。

## 幼少期 1 何よりも異常な普通

幸福である人間は不幸を知っている。

不幸である人間は幸福を知っている。

幸福でも不幸でもない人間は、どちらも偽物であることを知っている。

垂水百済は不幸であり冷酷であり最凶であった。  
たるみず くだら マイナス マイナス マイナス

それは穢れに穢れた事実であり、歪みに歪んだ真実であり、壊れに壊れた現実であった。

本来、過負荷として膿み落とされた者の境遇は、もはや語るまでもなく最低で最悪なものとなる。

しかし、百済は愛された。

憎しみとともに愛された。  
悲しみとともに喜ばれた。

孤独とも虐待とも縁遠く、普通の子どもたちと同じように生活することが出来るのも、偏に彼の母親の愛情の賜物なのだろう。

けれど、過負荷は消えたわけではない。

与えられる異常な愛と過負荷ゆえの信念の狭間で、百済の精神と

肉体はゆつくりと、けれども確實に濁り、澀重なり、過負荷とする  
呼べない『モノ』へと変貌していった。

### 箱庭総合病院。

検査入院といつ名田で連れて来られた百済は、検査の順番がやつ  
てくるまで託児室で時間を潰すように言いつかった。

百済は幼いながらも自覚していた。  
遊具で遊ぶ『友達』と自分とでは、どこか決定的で壊滅的な違い  
があるのだと。

人形の手足を分解して無邪気に笑う女の子。  
人形は悲鳴を上げないが、彼女の四肢を解体したらどんな声を上  
げるのだろう。

喜色満面の顔で、他の子が作った積み木の家を破壊する男の子。  
彼の家を家族ごと焼いたら、どんな顔をするのだろう。

プラスチック製のすべり台の頂上で、頬杖を突きながらぼんやり  
と考える。  
不幸というものを考える。自分に当て嵌めて考える。

百済には不幸というものが解らない。幸せというものが解らない。  
結局のところは人の価値観によるものなのだから答えなど無に等  
しいのだろうが。

母親に聞くという手も残つてはいるが「じゃあアンタは今幸せな  
の? 不幸なの?」と逆に質問されてしまいそつだ。解らないから  
聞いているというのに。

お菓子をもらつた。幸せ。

食べたせいで虫歯が出来た。不幸。

歯医者に行つたらシールをもらつた。幸せ。

テレビに貼つたら怒られた。不幸。

死んだ。不幸？

生き返つた。幸せ？

化物と呼ばれた。不幸？

強く抱きしめられた。幸せ？

それがどうした。

幸せだ不幸だと一喜一憂するのが人間だといつのなら、自分はとても平坦な『ナニカ』なのか。

解らない分からない判らないわからないワカラナイ。

「ねー、早くすべつてよー」

唐突に思考は遮られた。

後ろを振り返れば、黄色に近い茶髪の男の子が順番を待っていた。

「ああ、ゴメン」

するするとすべり落ちる。

すぐに男の子も降りてきた。

「えへへ、ほく、ひとよしそんきゅう。」

男の子はそのままの名の通り人のよせそうな笑顔で名乗った。

「ふうん」

知っている。というか名札がついている。  
だが服装から見て、検査を待っているわけではなさそうだ。

「ん」

胸に着けた名札を、善吉に見えるように差し出す。  
書いたのは百済の母親だ。平仮名ではなく漢字で書いてあるのは  
誰に対する嫌がらせなのか。  
善吉はしばらく名札を見ていたが、

「読めないよお」

『せんきぢ』が たすけ を もとめてきた

『『たるみずくだら』と読むの』

『くだいら』は 答え を 教えた

用は済んだとばかりに、百済はその場を離れようとするも、

「一緒にあそぼーよー、くだいらちゃん」

右袖を善吉に元に掴まれる。

「何で?」

「一緒に遊ぶと楽しいから！」

どうしたものか、と壁に掛けられた時計をちらりと見やる。  
看護師が呼びに来ると言っていた時間までは、まだ大分余裕があった。

「……何して遊ぶ？」

「すべり台！」

「今さつきやつたばかりだよね」

「面白いよねすべり台…」

百済のツッコミを華麗に無視し、手を繋いだまま上ひらつとする。  
人の話をあまり聞かない性格らしい。百済は何故か、傍若無人を地  
で行く自分の母親を連想してしまった。

「……まあ、いいけどね」

ため息を吐きつつも、どこか嫌いになれない不思議な少年に、百  
済は付き合つことにした。

これが、人吉善吉と垂水百済の最初の出会い。  
ファーストコンタクト

後に、一人の異常と、一人の過負荷の陰に立つこの少年たちは、

この時互いの運命が噛み合ひ、軋み始めたことなど知る由もなかつた。

## 幼少期 2 完成と見た目幼女と負完全（前書き）

いつも、久木篁と申します。ネギまを凍結させて懲りずに手を出しています。優柔不断ですが末永いお付き合いを。

## 幼少期 2 完成と見た目幼女と負完全

無意味だと、考えることに意味がある。

無関係だと、唱えることに関係がある。

無価値だと、信じることに価値がある。

例え全てが無駄だとしても、そう思はずにはいられない。

しばらく善吉とともに遊んでいた百済は、看護師に呼ばれて検査室へと向かっていた。

託児室を出る際、善吉が悲しげな顔をしていたが、帰りにまた寄ると約束すると喜色満面の表情に変わった。よくもまああれだけ口々口と変えられるものだと感心する一方で、疑うということを知らない 愚かしさすら感じる純真な精神に呆れてしまう。

「まあ、どうでもいいけどね」

所詮は今日会つたばかりの他人だ。

当然、約束も守るつもりはなかつた。

心の底から幸せそうな笑顔。

怒りは沸かない。

悲しみは募らない。

憎しみは生まれない。

ただ、理解に苦しむ。

「……どうでもいいけどね」

噛み締めて、吐き捨てるように再び呟く。  
そもそも、どうして自分はあんな遊びに付か合ひなどと思つた  
のだろうか。

上つては降りて、上つては降りての繰り返し。何が面白い。そう

いつものだと理解していくも、その行為に意味も価値も見出せない。

結局のところ、この世界は

『『キリヒトリ無意味で』『無関係で』『無価値なモノなんだね』

「

唐突に。

切り取られたページを、無理矢理挿し入れたかのような不自然さ  
で。

その少年は、百済の前に現れた。

伸ばし放題の、色素の薄い頭髪。

小脇に抱えたウサギのぬいぐるみはツギハギだらけで、首が千切  
れかけている。

何より異質で際立っていたのは、こちらを見据える目だった。

血のように濁り、泥のように深く、夜のように黒く輝いている。

名札には『くまがわみそだ』とあった。

言葉を交わす必要はなかつた。

一目でわかる。

コイツは、人間として既に破綻している。

完全に壊れており、それが完成形として完了している。

けれど、その気持ち悪さが酷く心地よい。

「……その通りといえばその通りだけど、少なくともお前のように悲觀も諦觀もしていないつもりだよ」

「『くまがわ』には僕が悲觀や諦觀しているように見えるんだ？」

「

「違うのか？ 最初にお前を見たときは、同類を見つけたような暗い期待に満ちた目をしていたけど、今は敵意 というより嫌悪しか感じない。それは僕がお前のように不幸を望んでいないくて、この世界に対して正負を問わず何の感情も抱いていないと気付いたからじゃないのか？」

この『くまがわ』の心の根底には、世界は無意味で無関係で無価値であり、ならば何をしても問題はないといつ退廃的思想・破壊願望が深く根付いている。

しかし、百済は主義思想など持ち合わせてはいない。興味すらない。

例え本当に、世界が無意味で無関係で無価値なのだとしても、そこからどういったことを思ふには至らないのだ。

だから何だ。

それがどうした。

そこでスッパリと切り捨てる。

間違いを正さず。  
歪みを直さず。

あるがままを受け流し、放棄する。

「『……やれやれ』『一人目は失敗があ』『異常ばかりを集める病院と聞いたから少しは期待したんだけど』」

言葉とは裏腹に、『くまがわ』の顔には気味の悪い笑みしか浮かんでいない。

「『残念だなあ』『キ!!』とはい友達になれると思ったのに』」

「お前と傷の舐め合いをしろと? 御免だね」

百済も鮫のよう<sup>マイナス</sup>な乱杭歯をむき出しにして嗤つ。球磨川とは別種の、けれど根源を同じとする壮絶な笑み。

この場に第三者がいれば、少年たちの背後に、身を絡ませ合いながら互いに呑みこもうとする一匹の蛇を幻視しだろう。

「『僕たちは』『生まれながらの負け組だよ』」

「知ったこっちゃないね。僕は勝とうが負けようがどうでもいい。

それ以前に、勝負する気も興味もない

「『僕は』『敗北者だ』」

「ああ、僕も失格者だ」

「『僕はキミが嫌いだ』」

「僕もお前が嫌いだ」

だから

「『だからとても気分がいい』」

両者ははじばらへ無言のまま睨み合っていたが、どちらからともなく歩き始め、すれ違い、けれど一言も発することなく、振り返ることもなかった。

「いらっしゃい垂水百済くん。そこに座って楽にしてね

百済が指示された検査室の中に入ると、白衣を纏った人物が話しかけてきた。

椅子に腰かけ、信じられないものでも見るような目で少女を観察する。

外見年齢は、三歳児である百済よりも一ぐらか上 小学校高学

年くらいだろうか。

黄味がかつた茶髪という、つい最近というか数分前まで見ていた特徴的な髪をリボンで一つに束ねている。

首から提げた身分証には『人吉瞳』の名とともに顔写真が記載されている。

そこまではいい。

問題は名前の隣に印字された年齢の欄。

心療外科 人吉瞳（29）

ギリギリ二十代だからまだ若いとか、そういうレベルの問題ではない。というか名字から分かつたが善吉の母親なのか？一児の母には到底見えないとかそれ以前に結婚可能な年齢には見えない。彼女の夫はどんな思いで結婚したのだろうか。

「？ どうかした？」

「いえ、別に」

不思議そうに首を傾げる仕草が、これまた年不相応に似合つてしまう。

百済は思わずため息を吐いた。

「将来苦労するだろうな、善吉も」

「……善吉くんを知ってるの？」

独り言のつもりだったのだが、息子の名が出たのを不審に思ったのだろうか。

人吉女史は訝しげな顔で百済を見据え、身構えている。

「託児室にいた、先生と同じ髪色の男の子でしょうへ、それきまで一緒に遊んでたんです。心配しなくとも、泣かせるような真似はしませんよ」

「……やつ」

今度はどこかホッとした表情になる。親子揃って百面相が得意なのだろうか。

「それじゃあ改めまして、キミの担当医になる人吉瞳です。それで百済くんはどうしてこの病院に連れて来られたか分かる?」

「僕が普通の子とは違うからですね。何処がどうとは言いませんが」

「この病院を訪れたときから感じていた違和感。

患者のほとんどが、百済と同年代の子どもであつたこと。  
そして何より、共感覚とでも言えばいいのだろうか、自分と同種の匂いを感じるのだ。

「Jの病院は、僕のような異常者を集めているんですね」

どうでもいいですけど、と確信を突く百済の言葉に、人吉女史は目を見開いた。

これまでにも大勢の異常と接してきたのだろうが、自分のような存在に遭遇するのはせいぜい一度目といったところだらう。

「それで? 先生から見て、異常な僕には入院が必要なんでしょうか

入院したところで改善するとはと思えないが、一応尋ねる。

「……キミの中ではもう答えが出ているんでしょう？ 私にキミは治せない。患者に治そうとする意志がない限り、医者は何もできない」

苦笑する人吉女史。その笑みは、無力な自分に向けた嘲笑なのだろつか。

「最後に一つだけ質問していい？」

「僕に答えられるものなら」

「垂水百済くん。キミは 幸せになりたい？」

百済は考えるような素振りをして、

「興味ありませんね、そんなもの」

言い切った。

そして席を立ち、検査室を後にする。

その際、入り口で足を止め、人吉女史に振り向くと、

「僕からも最後に一つだけ。先生の最後の患者として 僕は合格ですか？」

答えは必要なかつた。

ただ、背後で微かに聞こえた「失格よ」という呟きに、百済は満

足げな笑みを浮かべるのだった。

約束を守るつもりはなかつたが、時間が余っていたこともあり、百濟はざるざるとやる氣のない足取りで託児室に戻つた。

途中、少女を見かけなかつたかと何人かの職員に尋ねられたが、知るわけもないでの少女の特徴だけ聞き流した。

さてさて、あの純朴少年は何をしているのかと中を覗けば、善吉の他にオカツパ頭の少女がいた。

少女は黙々と知恵の輪を解いていき、傍らに積んでいく。善吉はそれをキラキラした目で見つめている。

後姿からでも感じる少女の異常性に興味を抱いた百濟は、扉に身体を預けて一人のやり取りをしばらくの間觀察することにした。

「……これで全部だ」

「わあ～、すご～す～い～！」

淡淡とした様子で解いた知恵の輪を放り捨てる少女とは裏腹に、善吉は目に見えてはしゃいでいる。

「次はコレできるー？」

それだけでは飽き足らず、六十四面のルービックキューブを持ち出してきた。

託児室の隅にある知育玩具の山に目をやれば、明らかに幼児向け

ではないパズルも多く混ざっている。この託児室も、異常を選別する振るいの役目をしているらしい。

次はアレ、次はソレと絶え間なくパズルを差し出す善吉に対し、少女はつまらなそうな表情を崩すことなく解いていく。

「あっ、百済ちゃん！」

やがてパズルもなくなり、百済も見飽きたところで善吉がひかりに気付いた。

善吉は百済の元に駆け寄ると、

「百済ちゃん百済ちゃん、めだかちゃんってスゴいんだよー。頭良いんだよー。僕が出来なかつたパズルとか全部解いちやうんだから！」

「ああうん、ソリヤヨカツタネー、メダカチャンツテダレー？」

興奮冷めやらぬ様子でまくし立てる善吉に、明後日の方を向いて棒読みの台詞で返す百済。そのまま手を引かれて少女の隣に座られる。

「めだかちゃん、僕の友達の百済ちゃんだよー。」

「そりか」

「……ども」

挨拶とすら呼べない初会話。

全てにおいて達観 諦観していそうな少女と、周囲が熱くなれ

ばなるほど冷める性格である百済としては、これでもお互にユニークーションを取るうつと頑張った方だわ。

「…………」

「…………」

それ以上会話が続かない。

善吉が何やら騒いで飛び跳ねているが、異常な二人は黙つたままだ。

百済はすることがなかつたので、再びパズルに挑戦し始めた善吉を適当にあしらいながら、めだかというの名であるらしい少女を観察することにした。

服装は、シンプルながらも金のかかつていそうな意匠のワンピース。

顔立ちは整つていて、今のどこの異性に興味のない百済でも将来は絶世の美人になると分かる。

けれどその表情は相変わらずの不機嫌　　といつより全てに對して興味を失っているようだ。

こんな顔を見ていると、やつき会つたあの少年に言われた台詞が思い出される。

「……世界は無意味で無関係で無価値なモノ、か

「　っ！　貴様、それを何処で！」

それまで沈黙を貫いていためだかだつたが、百済が何となく口に

した言葉に過敏なほど反応した。  
その様子で百済は確信した。

「」の少女も、アイツに出遭ってしまったのだと。

「とある負け犬が僕に言つたんだよ。そのあと友達にならうとか言いだしたから丁重にお断りしたけど。あいつとは一度と遭いたくな  
いね」

「……そうか」

めだかは初めて感情らしい感情を顔に表した。

それは戸惑いであり、躊躇いであり、恥じらいだった。

パズルを解いていたときから、めだかの異常性にまおおよその見当がついていた。

その異常性ゆえに、今まで自分に分からぬことなどなかつたの  
だらう。

だが、「」の病院に連れて来られて、あの少年に出遭い、一つの真理を刻み付けられた。

その真理が間違っているとは決して思えない。百済も少なからず同感だからだ。だから「」や、あの場で否定も肯定もしなかった。

「貴様は、生きていることに価値があると想つか？　生まれたこと  
に意味があると思うか？」

平坦な口調で、けれど肯定を望む、すがりつゝよつた感情が見え  
隠れする声音で、めだかが問うてきた。

「……まあね」

百済は虚飾も誇張もなく、簡潔に自分の考えを述べた。

「その価値とか意味とかは、自分で見つけなきゃならないもののか？ 絶対に他人の手を借りちゃいけないものなのかな？」

「どうこうことだ？」

「傍目八目、難しいと思える問題ほど案外他人の方が答えを知っているものさ。まあ結局」

そう言つて、ようやく知恵の輪を解いた善吉を手招きする。

「 偶には他人を頼るのも悪くないってこと

「 なーに百済ちゃん？」

「めだかちゃんがさ、僕とめだかちゃんが生きていることや生まれたことに何の意味もないって言つんだけじ、善吉くそむづく思つ？」

そう言えば本人を名前で呼ぶのは初めてだな、と思いつつ、善吉にも意見を求めた。

めだかも、何を言い出すのかと呆れ顔ではあつたが、無言のまま待つている。

そして、善吉の回答は。

「うーん、この世に意味のないことなんてないと思つなー」

「…………だつたら、だつたら私に教えるがよい。私は一体何のために生まれてきた？」

「あはっ、そんなの簡単だよ。百済ちゃんは一緒に遊んでくれて、めだかちゃんもパズルを解いてくれて、会つたばかりの僕をこんなに嬉しい気持ちしてくれたんだもの。だから二人とも」

そして、善吉は彼つていたフードを下ろして断言する。

「一人ともきっと、みんなを幸せにするために生まれてきたんだよ！」

屈託のない笑みは、めだかの心を融き解すことができたのだろうか。

百済は隣を窺つた。

「うわあああああああああん！　ああああああああん！」

めだかは泣いていた。悲しみの涙ではない。これは喜びの涙。百済と善吉に抱き着いて、人目を憚らずに大声で。年相応の女の子らしい泣き顔だつた。

「百済ちゃん、めだかちゃんはどうして泣いてるの？」

抱き着かれたまま、自分が泣かせたのだと勘違いしているらしい善吉も何故か既に泣き顔だ。

「いや違うから。これは嬉しくて泣いてるの。だから善吉くんも泣くなつて」

同じく身動きの取れないまま、泣いている友人一人を泣き止ませるのに百済が苦労したのはまた別の話。

垂水百済は、これ以上　否、これ以下ない負完全と出遭い。  
完全無欠の完成と出会い。  
掛け替えのない友人を得た。

けれど、百済はマイナスである。  
強きを偽り、弱きを騙る人でなし。  
歪んだ道化はどんな悲喜劇を演じるのか。

## 設定（前書き）

思いつき次第、後付けしていくます。

## 設定

名前

垂水 百濟

たるみず くだら

年齢

17歳

所属

一年十二組

服装

制服の下にパーカーを着用し、フードを被っている。

特徴

痩身長躯・ウルフヘア・信用できない笑顔・鮫のような乱杭歯

通称・蔑称

『詐欺師』『嘘つき村の住人』『招忌猫』  
まねきねこ  
『黒死猫』  
こくしびょう

信条

強きを偽り、弱きを騙る。

好きなもの

約束

嫌いなもの

特になし（嘘）

特技

奇術・人間観察・異常察知（直観的なもの）  
アノーマル

使用武器

大小様々な大量のメス

以下ネタバレ注意・読み飛ばしをオススメ

本  
名

安心院 不和

あじむ ふわ

経歴

七億人の悪平等の一人から生まれた。生まれると同時に母親は死んだが、安心院なじみの目に留まり、夢の中で息子 過負荷でありながら純粋培養の悪平等として教育された。

現在は、他の悪平等からの援助を得て生活している。

小学校入学の時点で、なじみの『媚暴録』<sup>メモリーダスト</sup>によって精神・肉体の負の記憶と『凶星惨禍』に関する記憶を封印される。

しかし、中学の球磨川による傷害事件をきっかけに、記憶を戻される。

能力

『<sup>デッドコード</sup>既述死』

百濟が持つ『凶星惨禍』の一部を切り取ったもの。体験したことがある死因から肉体及び精神が学習し、耐性を持つようになる。不死不老、傷が瞬間回復するというわけではなく、あくまで『死ない』だけである。

応用編として、体内に大量の武器や奇術のタネを仕込むことが出来る。

『<sup>ディザスター</sup>凶星惨禍』

百済が本来持つ、自爆系巻き込み型過負荷。

百済が今まで受けてきた負傷や病気、精神的ストレスなど、ありとあらゆる負の事象を自分を含めた周囲の人間にも強制的に体験させる。

オンオフのみ可能で、百済本人にもどうなるか予測や制御ができず、完全に無差別。必然的に、百済が傷を負えれば負つほどパターンや規模は増し、体験は累積する。

『メモリーダスト  
媚暴録』

なじみの一京分の一のスキル。

対象者の記憶を弄るとともに肉体も作り変えることができる。  
傷を受けたという記憶を消去すれば、実際に身体の傷も消える。  
在りもしない記憶を植え付けることはできず、あくまで本来の記憶を基に作り変えることや、完全消去・リップサービス封印しかできない。

百済（不和）に使用する際は『口写し』のようにキスをするが、本来は相手の素肌に触れるだけでいいため、彼女なりの愛情の現れでもある。

## 備考

身体中に火傷や古傷があり、特殊メイクで隠している。

幸福にも、マイナスの大前提である『他人の不幸』にすら興味がない。

他人の強さにも興味がないため、田之影空洞の『ミスター・アンノウン 知られざる英雄』を無効化できる。

幼少期 3 不幸好きい、あと変態（前書き）

書いていて思つたけれど、「マイシ」本当に幼児か？

### 幼少期 3 不幸好きと、あと変態

不幸を望むなら、自分のために生きることを貫け。

幸福を望むなら、自分のために死ぬことを貫け。

どちらも望まぬのなら、他人のために生きることを貫け。

「ぐーだーうーちゃん！　あーそーぼー！」

「……はいはい」

玄関で大声を上げている善吉と、おそらく　いや確實にいるだろつめだかの元に百済は向かう。

病院での一件があつて以来、善吉とめだかは四六時中一緒にいるようになり、何故か百済もその輪に巻き込まれることが多かつた。今日も今日とて教えた覚えのない百済の自宅に一人が押しかけ、遊び遊べと喧しい。

三人揃つての遊び場所といえば、これまで出会いの場所であつた病院の託児室だったのだが、やはりと言おつかなんと言おうか、めだかの「此処は狭くて飽きたぞ！」の一言で、『遊び場』の範囲は極端に拡大した。

具体的には、どこかの研究施設の広大な実験室や、まともに泊まれば費用は億を超えるだろうホテルの屋上プールなど、思い切り何

かが間違っているものばかりだ。

「お待たせいたしましたーっと」

「む、遅いぞ百済！ 呼んだらすぐに来い！」

「王立ちのまま腕組みをして、百済を叱咤するめだか。

他人の家の玄関で、どうしてそこまで偉そうにできるのだらう。他人の家の玄関で、どうしてそこまで偉そうにできるのだらう。というか、以前から言つてゐるのだが、事前に連絡くらいは入れてほしい。

「じめんじめん。今の今まで寝てたからとあ

パジャマ姿のまま応対に出たのはせめてもの抵抗だ。

「やうなのか？ 私は戦隊ヒーローを見て気分は最高だぞー！」

「僕もー！」

そう言つて、擬音で表すならシャキーン！ とおれりへはそのヒーローのものであろう決めポーズを取る一人。

寝起きなのにとても疲れた気分になつた百済は、寝癖だらけの頭を搔きながら「着替えてくるからもう少し待つて」と言い残し、部屋に戻つた。

洋服ダンスから、白い無地の長袖シャツと黒のズボンを引っ張り出して着用する。

洗面所で寝癖に水をかけて適当に直し、頭に巻いた包帯が乱れないか確認する。途中でキッチンに寄り、買い置きしていた惣菜パンを子ども用栄養ドリンクで胃に流し込む。三歳児らしからぬ朝食ではあるが致し方ない。

休日は朝から晩まで遊ぶことも珍しくなかつたため、留守電に伝言を残し、玄関に向かつた。

上がり框に座つて足をバタバタさせていた二人の背に声を掛ける。

「……ほんで？ 今日はどこで遊ぶ？」

基本的に、百済は遊び場にこだわりを持たない。

善吉は三人で遊ぶのがよほど嬉しいのか、どこであるひつと元氣いっぽいに遊び回る。

必然的に決定権はめだかに回つてくるのだが、黒神財閥の令嬢ともなればその常識・觀念はどこかぶつ飛んでいる。

「ふむ、今日は私の家で遊ぶぞ！」

だが、今日の提案はいつもの突拍子もないものに比べれば幾分まとも……なのだろうか。

「やつたー！ 百済ちゃん、めだかちゃんの家つてスッゴイ大きいんだよ！」

「感想が漠然としそぎていて逆に想像できないよ善吉<sup>ぜつき</sup>ちゃん」

見たことはないが、それは大きいのだ。黒神グループの会長宅なのだから。

「でも遠いんじゃないの？ 行き来にあまり時間かけたくないんだけど」

近くにあるのなら噂になつていらないわけがないし、百済が暮らす

極普通の住宅地にそんな豪邸があるのなら立つ以前に違和感しか感じない。

「それは問題ないぞ！」

いつの間にか外に出ていためだかが、パチリと指を鳴らす。それを合図に烈風を巻き上げて上空に現れたのは漆黒のボディを持つ大型の

「……軍用ヘリっスか」

「わーい！ ヘリコプターだー！」

田をキラキラさせていると、この悪いのだけれど善吉くん。キミは本当にあれに乗る気なのかい？

タンデムローターの轟音で、近隣の住民が何事かと窓から顔を出している。悪目立ちしそうだった。

「大体、どうに着陸させる気だよ。そんなスペースないでしょ」

百済の血毛前の道路は、車二台がギリギリすれ違えるほどの幅しかない。機体そのものは何とか収まるだろうがローター部分は間違いないく家屋を直撃する。

「ふふん、愚問だな百済よ。この私がそのことに考えが及ばなかつたとでも？」

「むしろこれ以上何か考えがあるのかと懸りつと不安で仕方がないよ」

「まあいい。善吉、百済、早く乗るがよい！」

そしてヘリから垂らされた縄梯子。

躊躇いなく足を掛け、上つてゆくめだか。

イヤナヨカンから、トテツモナクイヤナカクシンに変わった。

「いやいやいや無理だから。僕三歳、キミたち一歳。おわかり？」

「百済ちゃん、はやくー！」

「善吉つちひんも素直に上らないで！」

一人とも行動力ありすぎだから、という百済の叫びは轟音で搔き消された。

兎にも角にも、善吉もああでは仕方がない。一人と出会つてからもはや癖となりつつあるため息を吐きつつ、百済も縄梯子に足を掛けた。

それと同時に梯子の巻き上げを開始するヘリ。

『さあ、私の家へ向かうぞー。』

「どうあれスピーカーで話すのをやめてほしいなあ

ウイーン、と巻き上げられながら、明日からの近所付き合いで苦労しそうだと、現実逃避気味に主婦じみた考えで辞退する百済であった。

「ねつ！？　スッゴイ大きいでしょ！？」

「ああうん、ソウダネー」

着陸したヘリの窓から外を覗く。

黒神グループ。

世界有数の大財閥、その会長宅なのだから、世間一般の常識に当てはまらないような豪邸に住んでいるのだろうといつ百済の予想は概ね当たっていた。

しかし、

「限度つてあるだろ、つこ……」

百済の住まう一軒家など十や二十は余裕で入ってしまうそうな洋風建築は、屋敷ではなくもはや城に近い。

広大な野原は、めだかに言わせれば「ただ広いだけでつまらない」ものであるらしく、屋敷の後方にも同じ規模で広がっているらしい。その野原をぐるりと取り囲むのは戦車でも打ち崩すことが不可能な厚さと高さを持つ鉄扉と城壁だ。

「……要塞かよ」

「何を呆けている。早く降りるぞ！」

めだかに急かされてヘリを降りる。

足元に広がるのは屋敷の玄関まで延びるレッドカーペット。その

両脇にはすいりと並んだメイドさんと執事さん。

『お帰りなさいませお嬢様!』

一糸乱れぬ動きで一礼するメイドさんと執事さん。めだかはそれに軽く手を挙げて応え、善吉に至っては暢気にして「ほんにちはー」と挨拶している。

「……もつこいや」

人生は諦めが肝心、といつのは誰の言葉だったか。

善吉に背中を押される形で、百済は黒神宅に足を踏み入れた。内部も絢爛豪華の一言に及ぶのだが、頭が痛くなつてきた百済は早々に観察するのを諦めた。

通されたのはめだかの自室であるらしく。子供部屋らしからぬ内装ではあつたが、ぽつりと飾られているビスクドールや掛けられた子供服が、からうじてめだかのために用意された部屋であることを教えていた。

「ああ、遊びだー。」

『』からか大量のボードゲームを引っ張り出すめだか。

箱庭病院であれだけの知育玩具をいとも簡単に解いていためだかにとって、文字通り児戯に等しいものなのだろうが、三人ができる遊びとして彼女なりに考えた結果なのだらう。

場所は異常だが、遊びの内容は至極まともであることに百済は安堵するのだった。

「……にしても広すぎだらうよ」の家

善吉とめだかがオセロをし始め、田済も傍らでそれを眺めていた。だが、長丁場になりそうな雰囲気 めだかが善吉に合わせてレベルを落としていたため だったので、めだかに一言「散歩していくる」と伝えて部屋を出たのだ。

それがいけなかつた。

「迷つたねーこりゃ

口に出しても虚しさが増大する一方だ。  
道を聞こうにも、十数分歩いて誰とも出会わない。

「玄関からめだかちゃんの部屋までの道は覚えているから……まあ  
は玄関でも探すか」

とりあえず迷路脱出の定石として『左手の法則』を実行することにした。これは壁に左手をつき、壁に沿つて進んでいけばいはずは出口に辿り着くといふものなのだが。

「他人様の家の中を使う羽目になるとは思わなかつたよ」

愚痴りつつも進んでゆくと、一際異質な扉の前に辿り着いた。  
鎖で幾重にも囲い、こいつもの南京錠で封印された重厚な造りだ。

押し開けてみると、どうにか子供も一人が通れるくらいの隙間ができる。

「……中に人がいれば御の字か」

隙間に身体を捻じ込む。

「ここは……図書室か？」

百済の目に飛び込んできたのは、大量の本、本、本の山。大人の背丈の倍はある本棚にはみつしりと本が収まっている。それも専門家しか理解できないような難解な学術書ばかりで、百済の知る図書館のような安らぎなどの多幸感はない。

照明の類がないため薄暗く。

あるいは全身に襲い掛かる負の重圧。

この部屋全体が不幸を望んでいるかのような、粘り 纏わりつく執念が百済には酷くむず痒い。

本棚の合間に縫つように進んでいく。途中、積み重なった本や乱暴に丸め捨てられた紙屑などがいくつも放置されていた。

どうやら、この部屋を使用している人間は片付けには興味がない性格であるらしい。

それが、彼女だ。

部屋のほぼ中央、唯一照明のついた机にかじりつき、鬼気迫る表情で狂ったようにペンを走らせている少女がいた。身体を鎖で縛りつけた拷問の如きスタイルで、脇目も振らず一心不乱に学業に励む姿は一種の造形美として百済の肌を粟立たせた。

百済は少女に声を掛ける事もなく、本の山の一つに腰かけた。少女は百済に気付いていないのか、それとも意識して無視を決め込んでいるのかは分からないが、ペンの音だけが響く空間の中、互いに無言のまま時間だけが過ぎて行った。

「おいため」

「んん？」

一十分ほど経ち、百済が何故かあつた奇術の指南書を半分ほど読み終えたところで。

少女らしからぬ口調で呼びかけられた。

「百済がページから視線を移すと、少女がこちらを睨んでいる。

「さつきから視界の端で鬱陶しいんだよ。邪魔だからひとつと失せ

「ひ

「そりや確かに、先客のお前に挨拶も許可も取らなかつたのは悪いと思つや。けど、それがどうかしたか？」

百済も乱暴な口調で、少女を睨み返す。

「鎖で縛られているお前にとつて、僕はそんなに氣を取られるようないわよ、ああ？」

少女は苦虫を噛み潰したような顔をしたが、それ以上は何も言わず再び机に向かい始めた。

百済は本を元の場所に戻すと、出入り口ではなく、少女の隣に歩み寄る。

上から紙面を覗き込むと、そこには無数の数式や遺伝子配列、薬の化学式らしきのもが延々と羅列してあった。

「はつ、さつぱりわかんねえや」

「……当たり前だ。テメヨみたいなお氣楽で幸せそうな奴に解けるものじゃない」

「へえ、さつ見えるか？」

「私は幸福を嫌悪する、忌避する、拒絶する。楽しむことはなまけることだ。喜ぶことはだらけることだ。笑うことは不真面目なことだ。歴史上の天才の尽くが不遇の人生を送っている。偉大な発明や発見のほとんどが劣等感から生まれている。素晴らしいものは地獄からしか生まれない！」

少女は両手を机に叩きつけた。それだけでは飽き足らず、積まれていた本を蹴り飛ばし、時計や水差しを叩き落とす。

「それに比べてこの私はどうだ！？ 恵まれた生まれ恵まれた容姿恵まれた才能恵まれた環境！ クソ喰らえだ！ こんな幸福のままじゃ私は駄目になる！ もつと苦しまなきや、もつと追い込まれなきやダメだ！ もつと地獄を、もつともつと地獄を！..」

形振り構わず物に当り散らす少女。

その姿に、欲望に。

不幸の何たるかを知らないド素人の醜態に。  
百済は殺意を覚えた。

「 そこまでにしどけよ不幸もどきが」

唐突に、少女の右腕に鋭い痛みが走った。

手首から肘の辺りに掛けて、無数の細かい切り傷が出来ていたのだ。今暴れたために出来たものではない。いずれもそう深くはないものではあったが、それらは少女の動きを止めるには十分な役割を果たす。

突如現れた傷に困惑する少女の隙を逃さず、百済は少女を椅子ごと全力で蹴り飛ばした。

鎖に繋がれていたため、少女は机の上に吊るされる形となる。

百済は机に飛び乗り、少女に覆いかぶさる。

左手は少女の首を握り、右手は袖口から取り出したメスを握んで、少女の琥珀色に輝く瞳の数ミリ手前に突き立てた。

「……いいこと教えてやる。今までお前がどんな不幸を経験してきたか知らないけどな、そんなもんは不幸ですらねえよ。本当の地獄がどんなものか見たことがあんのか？ 自分の断末魔を聞いたことは？ 屍臭を嗅いだことは？ 生きながら身を焼かれたことは？ 骨という骨を碎かれたことは？ 不幸が味わった地獄のほんの一端

でも見たいつつーんならその綺麗な両の目ン玉抉つて素敵で愉快な光景たっぷり見せてやんよ」

ぎりぎりと左手に力を込める。

少女が腕を引っ搔いてこようがお構いなしだ。

友人の家族だらうが知つたことか。

「つか、がつ、が、はつ！」

「素晴らしいものは地獄から生まれる？ 地獄からは最低と最悪しか生まれねえよ！ 世界の天才や偉人は不遇の人生を送つてゐる？ お前の頭ん中にご本人降臨して囁きでもしてんのか？ ボクノジョンセイハフコウデシター、ワタシノジンセイハサイティデシター。お前ひとりの価値観で他人の人生の良し悪し決めつけてんじゃねえよ」

そこまで言つて、百済はようやく手を離し、机から下りた。

「ゲホツ、ケホツ！ ガツ、ゲホツ！」

少女が咳き込み、涎を垂らしながらも百済を視線で射殺そうとする。

「本当に 正真正銘の不幸なら、発見や発明なんか出来やしねえよ。這い上がる余地なんて微塵もなく、ただひたすら滑稽に、見るも無残に墮ちていくだけだ」

「……なら」

掠れた声で少女は問う。

「なら私はどうしたらしい！？ これ以上ない偉人アブノーマルになるために、私はどうしたらしいんだ！？ 教えてくれよー！」

「…………めだかちゃんがめだかちゃんならお前もお前だな。いくら姉妹でも余計なところまで似すぎだ」

あれだけ濃密だった殺意は嘘のように消え去り、のんびりとした動きで少女に手を伸ばす。

少女は思わず目を閉じるが、訪れたのは痛みではなく、頭を優しく撫でられる感触。

「何でもかんでも一人で背負いすぎだつた。天才たちだつて理解者がいたから死ぬまでやつてこれたんだろうが。お前も友達でも作つてそいつを頼れよ」

基本的な解決にはなつていない。おまけに他人任せ。格好のつかない答えであつた。

けれど、

「テメエ、結構バカだろ」

救われた。

「まあ、お前に比べたらそうだわな

「……でも、ありがとな」

聞こえないほど小さな声で咳き、一筋の涙を流しながら、糸が切

れたようす少女は黙りこなした。

「…………あ、帰り道聞くの忘れた」

水面を漂つよつた感覚と柔らかな熱で、黒神くじらは田を覚ました。

視界に映るのは、滅多に見ることがなかつた白毛の廊下と、誰かの背中。

自分は今、背負われているのだとすぐに理解した。

「やつと起きたか。つかお前軽すぎ。食つもん食わなことでも伸びねえぞ？」

聞き覚えのある声。

何故だか無性に恥ずかしくなつたくじらは、百濟の肩から顔を離した。

「おこテメH

」

「お前それ女の言葉遣いじゃねえぞ。ついでにテメヒじゃねえ。垂水百済つー立派な名前があるの」

「ああやうかよ。私もくじらって名前がある。それで垂み……田済、どうして私をおぶっているんだ？」

「名前呼び捨てかよ……まあこいつだ。お前に帰り道を聞いたと思つてな。起きるまで待つのも、放つておくのもアレだつたし、何となく？」

「帰り道つて……百済、もしかして迷子か？」

田済は答えない。けれど全身から『それは言つなオーハ』が撒き散らされている。

「へえ　ふうん

いやら、とくじらの顔に意地の悪やうな笑みが浮かぶ。

「迷つてんだあ。私にあんなこと言つといてガキっぽー！」

「三歳だからガキでいいんだよ、落とすぞ！」

「あーあ、じやあこの優しい大人なくじらさんが仕方なーく教えてやるよ。ちよつと止まれ」

「おや意外と親切。しかしその少女には裏の顔が　痛つー」

「馬鹿なこと言つな。じゃあ……回れ右へ

「暴力反対。つか方向逆かよ。」

「ぶちぶち言いながら、反対方向に歩き始める百済。

「といひで百済はどうして私の家にいるんだ?」

「ほんとに今更だなその質問。めだかちゃんに誘われたんだよ。百  
曜の朝から叩き起しきれてな」

突き当つを右に曲がり、広大な野原を窓から眺めながら進む。

「妹と……友達なのか?」

「あ? あー、どうだうつな。家に誘つへりだから、向こうは友  
達だと思つてんのか?」

「私が質問したんだうつが

「友達の定義なんか知らねーって。お互にこいつ思えばそつなんじ  
やねえの?」

「……そういう、もののか」

「僕の主觀だから信用できねえけどな」

その後、くじらは何も言わなくなつた。ただ、ぶつぶつと低い声  
で呟いている。

少し怖いの止めてほしこと百済は思った。

階段を下り、大広間の前を通り過ぎる。

くじらが再び口を開いたのは、別の階段を上がり、同じような扉がいくつも並ぶ廊下を進んでくるときだった。

「じゃ、じゃあ……や」

「んー？」

「私も、その、と、友達になつていいか？」

消えてしまいそうな細い声。けれど、百瀬にせまつさつと聞こえた。

聞こえはしたが、わざの仕返しどよみかりに黙り返す。

「あ? なんだって?」

「い、の…………と、友達になつてください。」

見えないが、おじらへじらへじらの顔は真っ赤に染まっているだろ。

「オーケーオーケー、よく言えました」

「……テメヒ、性格最悪だな」

「親の教育がいいもので。んじゃあ、ほれ

肩越しに右手を差し出す。

「何だ?」

「友好の証つついー」と、とつあえず握手?」

「どうして謎問形なんだよ」

それでも、ぐじらは手を握り返した。

とても温かく　顔が綻ぶほど嬉しかった。

「ところで、めだかちゃんの部屋つてまだか?」

「あ、ああ。もう少し先、名前が扉に彫られてあるはずだから

あれだ、とくじらがとある扉を指差した途端、それは内側から吹き飛ぶよしに開き、

砲弾の如き勢いで、少年のよつな『何か』が壁に激突した。

「…………」

由渕、訳がわからず無言。

「…………」

くじら、顔を歪めて無言。

「ウ、フフ、フフフフフ。抱きついただけで正拳突きなんて手厳しいねめだかちゃん。けど大丈夫、お兄ちゃんには本心がちゃんと言わつているよ？ 照れ隠しなんだねううなんだね？ 本当は嬉しいけどお友達の前だから恥ずかしかったんだね？ ああもうそんな照れ屋さんなめだかちゃんも可愛いなあ」

クネクネガクガクと痙攣しながら、呪言めいたことを口走る少年  
っぽい『何か』。

「うわー、ヒ百済はくじらを見やる。

くじらば、氣まずそつこ、けれどもあからさまに田を逸らした。

「あのー、くじらさん?」

「……わっわと部屋に入つて扉閉めて鍵かける」

「いやでもこの人……」

「いいから早くー!」

言われたとおり、めだかの部屋に入つて扉を閉めて鍵をかける。

「わー、お帰り百済ちゃん!」

「お姉様……?」

帰つてきた百済に善吉は喜び、めだかは背負われてくるくじらを見て目を丸くした。

「百済ちゃん、お土産あるー!？」

「ねえよ。んで? 僕がいない間に何があつたわけ? 一人でオセ口してたんだよね?」

百済はめだかに説明を求める。

とりあえず、部屋の外のいるアレがめだかに抱きついて殴り飛ばされたことまではわかっている。その前が知りたい。

「つむ。実は貴様が出て行った後、勝負は思いの他あっけなく着いてな。貴様が帰ってくるまで将棋やチヨスもしていたのだ。そうしたらウチの変態兄貴が全速力で突っ込んできたのだ。だから私はこんなこともありますうかと体得していた格闘術をもつて」

「 ちょっと待て。兄貴？」

「うそ、めだかちゃんのお兄ちゃんの真黒さんだよ？」

話を遮った百済の疑問に、善吉と背中のくじらが答える。

「……あの変態的な物体Xの名称は黒神真黒。私たちの、尊敬できるかとても微妙な兄貴だよ」

確かに自分で『お兄ちゃん』とか言ってたなあアレ。

「つまり、黒神家は変なのがいっぱい居るんだな」

「「兄貴と一緒にするな……。」」

しみじみ言つ百済の頭を、めだかとくじらが同時に叩いた。

「こしても、締め出しちゃったけど本当に良かつたのか？」

「ああ。ここの程度じゃまだ生温い方だし」

「お姉さまの言つとおりだ。こつもならここのまま兄貴の部屋まで引

き摺つて閉じ込めて見張りを立てなければ心配なくらいだからな

「どういづ兄弟関係だよ」

「フフフ、めだかちゃんは愛情表現が少し過激なんだよ」

背後から聞こえてきた声に、丘済はくじらを背負つたままその場から飛び退き、めだかに至つては完全に臨戦態勢に入つていた。

立っていたのは当然 黒神真黒。

めだかが日常茶飯事と言つだけあって、兄の耐久性もかなりものであるらしい。

よくよく観察してみれば、確かに 男女の遺伝子的な骨格の差はあるものの 顔の造りがめだかやくじらによく似ていた。

けれど、普通だ。

めだかのような、ぐじらのような異常性を感じない。

同じ親から生まれ、同じ環境で育つて、妹たちだけ異常性が開花することなどあり得るのだろうか。

まあ、重度の妹愛も異常といえば異常だが。

「お兄様、鍵がかかっていたはずなのにどうやって……」

「それはねめだかちゃん。愛されあれば妹の部屋の力、ギなんか無に等しいからさー。」

いや意味わかんねえから。

扉を見れば、カギの部分が取つ手」と分解されていた。  
そこまでするか？

百済は真黒の深すきの愛（業とも言つ）に戦慄した。

「おや、善吉くんの他にも見慣れない子がいるね？ キミもめだかちゃんのお友達かい？ 仲が良くていいねえ。けど僕のめだかちゃんに対する愛には及ばない。ああ自己紹介がまだだったね僕はめだかちゃんの兄の真黒だよ。好きなものは妹、大事なものは妹だ。本当はもう一人、くじらちゃんっていう愛すべき可愛い妹がいるのだけれどこれが少し ついてくじらちゃんハアー！」

「吐血してぶつ倒れた！？ 何で！？」

血の池に倒れ伏す真黒にツツコむ百済と、衝撃的な光景に涙目になる善吉。

黒神姉妹は冷静に といつか虫ケラでも見る目つきになつている。

「ぐ、ぐじらちゃん！..」

バネ仕掛けのように飛び起きる真黒。  
もう何も言つまじ、と百済は傍観を決め込んだ。

「どうしたんだいぐじらちゃん！？ 僕があれだけ説得しても書庫から一步も出なかつたのにめだかちゃんの部屋にいて、し、しかもそんな素直な子猫のようにおんぶされてるだなんて！ くうう羨ましい！ 羨ましきるが名前も知らないキニー！」

「…………

「へじひ代わつてくれさあ代わつてくれー 待つてねくじらちゃん、

お兄ちやんがすぐに最高のおんぶをしてあげるからねグハアッ！」

見事な延髓蹴りを叩きこんだ。

吹き飛ぶほどの威力はないが、人体の構造と急所を熟知した、正に一撃必殺の破壊技だった。

そして反動を利用して体勢を整え、百済の背中に舞い戻る。

「……といひでお姉さま。いい加減、百済の背中から下りてくれませんか？」

「どうして？ 別にいいじゃないか、誰にも迷惑をかけたりしてないだろ？」「

「百済が困った顔をしています。それになんだか私も不愉快です」

「何だい、嫉妬か？ んん？」

「是が非でも下りていただきますー！」

「はつ、やれるもんならやつてみるー！」

「お前ら僕を挟んで喧嘩してんじゃねえええーー！」

姉妹に前後を封じられて辟易する百済。

「わーい、僕も混むるーー！」

「善吉つむらさんは少し空氣読んで頼むからー。」

「わあくじりちゃんが少しだからやんー。お兄ちゃんの背中まじだよー！」

「邪魔だーー！」

「僕もおんぶーー！」

「…………誰でもいいから止めてくれ」

友人の家に招かれ、日常を紡いだ。  
不幸好きの少女と出会い、不幸を説いた。  
妹好きの少年と出会い、変態を知った。

全てが夢であれば良かったと、今でも切に願う。

日常 1 ピ・ピ・ピ・ピ・ピ・えん、だああああつ！ b yめだか

日常と非日常に、そう大差はない。

獸にとって、人間が生きていること自体非日常だからだ。

本日、俗にゴールデンウイークと呼ばれる連休の初日。

天気は快晴、降水確率0%。

絶好の行楽日和であつた。

何処も彼処も親子連れで賑わい、騒がしいながらも和氣藹々とした雰囲気に満たされていた。

それはこの動物園も同様であった。

ただし、その入り口では既に一騒動起こってはいたが。

「さあ着いたぞ！ 動物たちを愛でて撫でて遊んでやううー、皆私に続くがよい！」

「待つてー！」

先陣を切つて動物園に呐喊してゆくめだか。  
その後を楽しそうに追いかける善吉。

「いつもの凛としためだかちゃんも可愛いけど、動物担当での無邪  
気なめだかちゃんも可愛いなあゲフェツ！」

「邪魔だから前でグネグネしてんなよ馬鹿兄貴。つか私は勉強の途中だつたんだがな」

深すぎる妹愛に悶える真黒。

兄の背を蹴り飛ばし睥睨するぐじら。

そして最後に

「と言いつつわざなく僕に負ふやうのやめてくれねえかなくじらちゃん」

寝癖が残った頭を搔き、欠伸を噛み殺している百済。

なんとも個性的すぎるこの五人組も、休日とことことで動物園に繰り出したのだ。

いつものように黒神家に招待された善吉と百済（輸送方法については既にご近所名物になっていたりするので割愛する）。

遊びの内容を決めようとしたのだが、偶然点いていたテレビにめだかが釘付けになった。

つられて見やれば、行楽地の特集をしているらしく、動物園を背景に、リポーターが通りかかった親子に話を聞いていた。

「動物園か……」

「百済ひぢゅんは行つたことある?」

「んー、去年幼稚園の遠足で行つたかな……。善吉ひじゅんは?」

「うふ、お母さんと一緒に行つたことあるよ」

動物さんかこいつぱいいたよー、と当たり前な感想を言つ善吉。

あの瞳先生と一緒に?

百済は想像した。

善吉と手を繋いで動物園を歩く人吉女史…………どこから見ても姉と弟だった。怖い絵になつてしまつた。

「 いや

「はい?」

黙つてテレビを見ていためだかがぼつりと呟いた。

「私も動物園に行きたいぞーー。」

「はあ、左様ですか

何となく、今後の展開がどうなるか分かつてしまつた百済であつた。

「いひして僕たちは動物園に来る」となったのでした、まる

案の定、早朝から迎えに来ためだかたち一向。

予想できていたからとこつて早起きするよつた考へは百済にはなく、身だしなみを整えるのもそこそこ、用意された車に乗り込んだ。

「……何度も言つナビさ、限度とか常識とかあるだらつ」

ちらり、と今しがた降りた車を見る。

動物園に似つかわしくない黒塗りのリムジンが威風堂々と停車していた。

周囲には人だかりができ、写真を撮る者まで現れる始末。撮つてビデオしようつとこつのか。

「動物以上に注目されてるし」

「百済くん、突つ立つてないで私らも行いひ」

呆れても仕方がない。

ぐじらに促されるまま、百済も動物園に足を踏み入れる。途中で変態っぽいものを踏んだような気がしたが、ぐじらが何も言わないでのスルーした。

「あれ？ めだかちゃんと善吉つちやんは？」

中に入ると、先に行つたはずの一人が見当たらぬ。

優しい善吉と理路整然としためだかの性格上、待つてゐるものと思つていたのだが。

「大方興奮してあつちかに走り回ってんだろ。あとと、私はどうからにする?」

背後から肩越しに延ばされた手がパンフレットを広げる。  
どれだけ文句を言つても、めだか同様楽しみではあるらしい。

「やっぱ爬虫類館は外せないよな。あとハシビロコウもこな、あの近寄るなつて田つきと雰囲気が好きだ」

動物のチョイスは少々微妙だが。

「一緒に見るのは決定事項なのね、まあいいけど。ほんじゃリクエストにお応えして爬虫類館から回りますか」

子供向けにやたらデフォルメされた地図を確認し、爬虫類館へ向かう。

ちなみに真黒はその場に放置した。放つておいても、余りある妹への愛とやらでめだかかくじらの元へ飛んでくるはずだ。即座に反撃されるだらうが。

「こしても人が多いな。思わず解剖したくなっちゃう?」

「笑つて物騒なこと言つてんじゃねえよ、僕たちだって同じ立場だらうが。なんことより、僕はお前が来たことに驚いてんだけだな」

実は百済と出会った後も、くじらの不幸好きは治まることとはなかった。

睡眠時間と食事をこれまで多く取り、何故か百済が居る時に限つてではあつたがめだかたちとも遊ぶようになった。けれど、それ以外の時は相変わらず書庫にこもり、机にかじりついて数式を

解く日々が続いていた。

気付いた点と言えば、勉強しているときの顔つきが幾分柔らかくなつたことが百濟には不思議だつた。以前は強迫観念に駆られた鬼のような表情だつたのだが、今はどこか余裕のあるものになつているのだ。

心境の変化でもあつたのか、と一度聞いたことがある。

くじらの答えは、

『過去の偉人たちには理解者がいたから不幸ではないし孤独でもなかつたんだろ？ だつたら私にも必ず素晴らしいものを生み出せる。今ならそう確信できる。私にもちゃんといるからな！』

というものだつた。

よくは分からぬいが、自分の意見 あれは脅迫に近かつたがを参考に、新たな考えに至ることが出来たのだと納得することにした。

「別に妹とばっかり動物園に行くなんてズリーとかそういうのじゃなくてだな、たまたま、偶然にも今度の研究対象がこの動物園にいる猛獸だつたんだ。都合がよかつたからついてきた。特に深い意味はない、うん、ないんだ」

余談ではあるが、出かけることを聞いたくじらが、それまで着手していた研究をほっぽりだして動物対象の研究に切り替えたことは誰も知らない。

「お、着いたぞ？ 爬虫類館」

「外は結構普通なんだな」

「ナツヤ ナツだひ」

密林を模した爬虫類館の内部は薄暗く、動物のいるガラス張りの檻だけが淡いライトで照らされていた。

独特の光沢をもつ鱗や瞳に、くじらの目を輝かせる。

「……一匹でもいいから欲しいなー」

「お前だとペシトとこうより動物実験に使いつつで怖いな」

「もちろんそれとは別にだ」

「実験動物は既にいるのかよ」

その後もカメレオンに餌やりをしたり、ニシキヘビに巻かれたりと濃い時間を過ごした。

「うあー、まぶしー」

薄明かりに慣れていた眼が、日光で眩む。

「次はハシビロコウだな」

「あのお前に雰囲気似てる鳥ね…………似てるって言えば、お前とめだかちゃんもそっくりだよな」

「……そんなに妹<sup>アイツ</sup>と似てるのか？」

「ああ、田つきはお前の方が数倍凶悪だけど、顔とか偉そうな話しおとかはほとんど同じだな」

「……そうか、同じか」

何気なく振った話題なのだが、どういうわけかくじらの機嫌が悪くなり、首に回された腕の力も強くなつたような気がする。

「嫌だな」

「ん？」

「なんでもない」

どうかしたのかと立ち止まり、振り返るが、くじらは顔を伏せてしまつていて表情は分からない。

「気分が悪いなら休憩するか？」

「いい、大丈夫」

「んな不機嫌<sup>フジヤク</sup>そうな声で大丈夫って言われても っ！」

そこで百済は異変に気が付いた。

「くじらちゃん」

「だから大丈夫だつて　」

「やうじやなくて……静かすぎないか？」

え？ とくじらも顔を上げて周囲を見回した。  
道行く親子連れや風船を持ったマスクコットキャラの着ぐるみ。  
平々凡々とした動物園の一風景だ。  
だが、そこにはあるべきものが、なければならぬものが欠落していた。

「動物が、いなくなつてる？」

くじらの言葉通り、檻の中はもぬけの殻となつていた。

一つに近寄つて見てみると、鳴き声はおろか気配すら感じない。  
二人の横を、ただならぬ様子の係員が無線機に喚きながら走つていぐ。

「じうあむ田済くん？」

「じうあむむーいわあるも、ひとまず盡きひあやんたちと合流しよう  
が。真黒さんも……」いかにこなにつてことめだかちやんのところに  
いるんだね」

入口からここまで来つことはなかつた。ならばこのまま進んだ先  
に三人がいる可能性は高い。

田済はくじらを背負つたまま走り出した。

幸いにも、三人とはすぐに合流を果たせた。

だが、様子がおかしい。

あれだけはしゃいでいためだかは傍から見てもわかるくらいに落胆し、隣にいる善吉に話しかけられても肩を震わせるだけで何も言わない。

その善吉の顔も悲しげで、必死にめだかを慰めようとしている。

「兄貴、どういう状況なんだこれは？ 動物全員アブダクションでもされたのか？」

「ぐじらちゃん、一研究者としてその発想はどうかと思ひつか？」

ぐじらが、数歩離れたところに立っていた真黒に声を掛けた。さすがに変態的行動は自重しているのか、苦笑を浮かべている。

「ああ一人とも……実はこれはめだかちゃんが原因なんだ」

「アイツの？」

「めだかちゃんの圧倒的存在感 威圧感のせいで動物たちが怯えてしまつたんだ」

「それでこの有様、ですか」

改めて、めだかの異常性には驚かされる。

万能であるがゆえに孤独で、完全であるがゆえに孤高で、完成しているがゆえに孤立する。  
望んで生まれ持つたわけではないだろう。「じうなれば異常も過負荷も大して変わらない。

「……しゃーねえな

ため息を吐き、くじらを下ろす。

「百済くん?」

「僕なりにめだかちゃんを慰めてみるわ

「何をする『だい?』

「まあ見ててください」

一人をその場に残し、めだかたちに歩み寄る。

「百済ちゃん……」

「百済あ……」

「ひどい顔だねえ一人とも。それはさておき

めだかの背を押して、檻に近づける。

「グスッ……何のつもりだ百済。こんなことをしても動物が出ていくわけがないだろ」

「いいからここで待つてなつて

言い残し、何処かへ走つていいく百済。  
そのまま五分ほど経つたときだらうか。

動物園の至る所から悲鳴じみた鳴き声が響き始め、奥から動物たちが飛び出してきた。

「わあー、ライオンさんだーー。」

善吉は両手を挙げて喜んでいるが、めだかは信じられないらしく呆けている。

ライオンはめだかに縋り付くような視線を投げかけ、血ら頭を垂れて服従の意を示した。

めだかが恐る恐る手を延ばして頭を撫でても、されるがままだ。

「善吉ー、触れたぞー！」

「よかつたねーめだかちゃんー！」

「一体何が……」

「百済くんが何かしたのは間違いないだろーけど」

ぐじらと真黒は顔を見合させて首を捻る。

飛び出してきた動物たちがめだかを怖がつていないこともそうだが、何より一人の目には、そのどれもがめだかに助けを求めているように見えるのだ。

動物は人間に比べて正直だ。

弱肉強食。弱者は常に強者に従うことで己の身を守らうとする。ならばこの場には、めだかよりも恐ろしい、めだかに助けを求める

たくなるやつな『何か』がいることになる。

「やつてみるもんだねえ。ここまでとは思わなかつたけど」

いつの間にか戻つていた百済が飄々と言つ。

「百済くん、これはキニガ?」

「ええまあ。裏に忍び込んで、ちょっと田を見ただけですよ?」

友達のためなら嫌われ者マイナスになるのも悪くない。

そう呟く百済の笑みに、真黒は感謝すべきなのだろうが、何故か震えが止まらなかつた。

帰りの車内。

動物と触れ合えたことがよほど嬉しかつたのか、めだかの興奮はいまだに冷めることはなかつた。

購入したぬいぐるみを抱きしめて、善吉と話し込んでいる。

「……百済くん」

「ん?」

車窓から外を眺めていた百済に、隣に座つていたくじらが話しかけてきた。

「さつを語つてたよな。友達のためなら嫌われ者になつてもいいって」

「うん」

くじらは「てん」と百済の肩に頭を載せた。  
柔らかな熱と、優しい香りが鼻腔をくすぐる。

「私は嫌わないからな」

「え?」

「百済くんが何をしても、誰にどう言われても、私は絶対に百済くんを嫌つたりはしないからな」

「…………」

静かに、けれど確固たる意志を秘めた口調。  
ふざけて言い返す気は毛頭なかつた。  
ただ一言だけ、

「…………」

「…………ありがと」

そう呟くだけだった。

口常 2 百済、十一歳 別れと誓い（前書き）

ここから数話挟んで少し飛びます。飛びします。カツ飛びします。  
飛びさないと始まらん。

あと、感想をいただきました。

こんな駄文でも読んでくれる人がいると嬉しいものです。

## 口算 2 百済、十一歳 別れと誓い

絆。縁。誓い。約束。

守るべきもの。尊ぶべきもの。

時には楔となつて胸を穿り、鎖となつて絞め殺す。

『私、この家を出ることにした』

「…………そうかい。遅かれ早かれそつするだらうなとは思つてたけど  
…………めだかちゃんや、真黒さんよ？」

『言つわけないだろ？ あいつらなら絶対止めるだらうじ。この口  
のために五年以上準備を重ねてきたんだ。例え百済くんが説得して  
も中止はしない』

「めだかちゃんが泣くぜ？」

『手紙も残したし、間違いなく泣くだらうな。その時は百済くんが  
慰めてやつてくれ』

「せうこうのあんま得意じゃねえんだよなあ」

『百済くんなら大丈夫さ。この私をここまで変えたんだからな』

「買い被り過ぎだつて。ついでに真黒さんの足止めもしなきゃなんねえんだろ？ 間違いなく発狂して暴走すんぞあの人。考えただけで胃が痛えよ」

『…………前に、百済くんは言つたよな。私の求めている不幸は不幸ですらないって。だったら私はそれでもいい。黒神くじらではない新しい環境、新しい立場、新しい姿、新しい視点で私なりの不幸を探し出してみせる』

「何もかもまひさいにして、か？」

『ああ。家族の記憶も消す。大切だからこそ、幸福だからこそ、兄貴も妹も善吉も、もちろん百済くんとの思い出も。初めて会ったあの日のことも動物園に行つたことも全て消去する。それが今の私に思いつゝ最高の……最悪の不幸だから』

「…………やつかよ」

『幻滅したか？ 百済くんからすれば見苦しそよな。記憶が無くなつたところど、《私》が消えて不幸好きの《誰か》が残るだけなのに』

「どーして僕が幻滅しなきゃならねえんだ？ お前が必要だと思つたから、そうしたいと思ったからそうするんだろう？ だったら僕は肯定してやるよ。せいぜい不幸もどきを追いかけて、お前の言う素晴らしこものを生み出していく、高笑いでもしながら僕に見せつけてみる」

『言われるまでもなこと。私は不幸を求め続ける。けど決して悲惨

「じゃないし、孤独じゃない。どうしようもなく厳しくて、どうしようもなく優しい理解者がいるとわかっているから」

「…………」

『だから、だから一つだけ約束してくれ』

「僕に守れるような約束なんてそういうないぜ？」

『もし、この先いつか《私》じゃない《誰か》に会った時、その《誰か》がとてもない愚か者で、《私》が望んだ結果とは違つていたとしても、絶対に《私》を好きでいてほしい』

「…………」

『《私》も百済くんが好きだ。友達としてではなく、異性として。それは《私》が《私》じゃなくなつても絶対に変わつたりはしない。愛なんて理解できない不確かなものに賭けるのは研究者として失格なんだろうけど、それでもそう信じずにはいられないんだ……お願いだから、私を嫌いにならないで……』

『…………ハア、守るのに苦労しそうな約束だなあおい』

『「めん』

「謝るくらいなら最初から言つんじゃねえよ。わかつたわかりました、誓つてやるよ。お前が誰で、どうなつていても、僕はお前を肯定して受け入れて助けて護つてやる。記憶を失つてようが知つたことか。約束したからには嫌だつつても助けるからな？」

『…………あつがとひ』

「あれど、お前も一つ約束しね」

『へ』

「何があつても、僕を信じ、『

『…………うん約束する。今も、これからもあつと信じてくれるから』

じあ……。

あたなひ、百瀬へん。

ああ……またな、へじひりせりだ。

時間が経つのは早い。

それは大人であろうと子どもであろうと変わることはない。  
深々と降る雪の中を、少年が歩いている。

垂水百済、十一歳。小学六年生。

同年代の子供よりも頭一つ高い瘦躯。薄く雪の積もつたウルフヘア。傷だらけのランドセルを背負い、真紅のマフラーを首に巻き、両手はコートのポケットに突っ込んでいる。

「……………ハア」

マフラーの隙間から白い息が漏れ、曇天の空に消えてゆく。  
ぐじらも、この空の下を歩いているのだろうか。  
電話を受けてから、十時間ほど経っていた。  
どこへ行つたのかは百済にもわからない。

彼女が探究する不幸。彼女の言つ素晴らしいもの。  
それらは決して自分とは相容れないだろう。  
確信にも似た予感があつた。

それでも。

「受け入れてやるさ」

ふと視線を感じ、足を止めた。

道の向こうに、見覚えのある黒塗りのリムジンが停まつていた。  
その前にめだかが立つている。自信に満ち溢れている凜とした仁王立ちではない。俯いてスカートの裾を握り、涙を堪えているようにも見える。

「どうした？ めだかちゃん」

聞かずともわかっているが。

「……お姉さまが、家を出て行った」

『幸せになるくらいなら死んだ方がマシだ』

「…………いや、いやいやいやいやー。」

いくら何でも他に書き方あるでしょくじらうやん！

あれだけ電話で大切な家族だの幸福だの言っていたのに…

渡された手紙に殴り書きされた文章は非常に簡素で、これでは家族を忌み嫌つて家出したと思われても仕方がない。というか、悪意しか感じられない。

不器用すぎでしょ、と呆れ果てる百済だったが、手紙の裏であるものを見つけ、苦笑した。

「百済、お姉さまは私を嫌つていたのか？」

袖をつまんでこちらを見上げているめだかの目には大粒の涙が溜まり、今にも零れ落ちそうになっている。

「私はお姉さまに迷惑をかけていたのか？ 勉強の邪魔をしてしまつていたのか？ 私は嬉しかった。お姉さまと一緒に遊べることが嬉しかった。お姉さまが笑ってくれることが嬉しかった。だがその

せいでお姉さまが私を疎ましく感じて家を出て行かれてしまったのだとしたら！」

そこまで言つて、堪え切れなくなつたのだろう。

小さく嗚咽が聞こえ、零がカーペットに染みを作る。

「……慰めるのも、僕の役目ね」

承つてやるとしますか。

腰を屈めてめだかの目線に合わせ、そつと頭を撫でる。  
完全無欠の異常性があつて大人びいていたとしても、百済にとつてめだかは年下で小柄な少女でしかない。

愛情表現の仕方がわからない彼女が愛した妹。

「心配しなくとも、お前のねーちゃんはそんなことで愛想尽かしたりしねえよ。少しばかり気持ちの伝え方が下手なだけさね。もし嫌いになつてたらこんな絵を残していつたりするかよ」

めだかに見せたのは、置き手紙の裏面。

そこに描かれていたのはめだか、くじら、小さく真黒、善吉、そして百済の五人が楽しそうに遊んでいる硬筆画。

紙面の片隅に、隠すように残したのは照れ臭かったからか。

「お姉さま……」

めだかは涙拭い、手紙を両手で包み込んだ。

「百済、私は待つぞ。お姉さまと再会できる日を、何年、何十年だろ？と待つてやる！」

「あー多分、そんなに待たなくてそのままのうち会えると嬉しいぜ。気は晴れたか?」

「つむー わつきよりは大分マシになつた!」

「そいつ結構。んで話はぐるっと変わるけどよ、あれは一体何してんだ?」

「…………」

「！」

「ちよつ、真黒さん！ 落ち着いてくれってー！」

白渕が指差した先では、全身を鎖で縛られ、みの虫状態で猿轡を噛ませた真黒がビックタンビックタンジャランジヤランと豪快に飛び跳ねている。それを口テオマシーンながらに必死で抑えているのは、最近体格とともに男らしい口調になつてきた善吉だ。

「私が今朝起きたときは既にこの状態だった。おやりくお姉さまの仕業だとは思うが」

寝込みを襲われたか、はたまた微笑みのひとつでも喰らつて悶死した隙を突かれたか。どちらにしろ、あの真黒（へんたい）を油断させるのは簡単だつただろう。

「……くじらちゃんが家出した」とは?

「手紙を読んだときは気が動転していてな、つい話してしまつた。鎖をほどくといつなるかわからんから、そのままにしている

「せめて会話にくらい参加をさせてやれよ。かなり大きな家族問題だろーが」

「言語が支離滅裂で文章として成立していなくてな。鬱陶しいので黙らせた」

「だから、お前ら姉妹の中で真黒の評価つてどうなってんの？」

「まあ、縛つたままにしたのは賢明な判断だけだ」

あんな血走った日の真黒など自由にしたが最後、黒神グループの総力を どんな手を使ってでもくじらを探し出そうとするだろう。用意周到なくじらのことだから、世界有数の財閥の力をもつてもそう簡単に見つかることは思えないが、助けると約束した手前、せめて少しでも身を隠す時間を稼いでやらなければ。

「つ！」

「一人とも暢氣に話してないで手伝ってくれよ、俺だけじゃ無理だつてー！」

轟吉の悲鳴が木靈する。

「よし、ゆべぞ百済！」

すっかり元の調子に戻つためだかに満足しながら、

「……メンドクセーなあおい」

今もどこかで不幸を探している少女に、再会したら文句の一つでも言ってやる」と心に誓つ百済だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3050ba/>

垂水百済はマイナスである

2012年1月10日23時47分発行